



インターネットと大学改革

■ 西尾 章治郎

インターネットは、社会においてさまざまな変革をもたらしている。たとえば、インターネットによる産業構造の変革については、IoT (Internet of Things: モノのインターネット) による技術革新により、携帯端末のみならず家電製品、自動車までもがネットワーク内に組み込まれるようになり、製造業等では垂直統合から水平統合への動きが急速に拡大し、オープン化の動きに一層拍車をかけている。

ここで言う「オープン」とは、「人や組織が共通の土台で競い合い、また、立場や利害を超えて協力することで、新たな価値を創り出していくこと」と私は捉えている。

オープン化が急速に進むなかで、社会そしてイノベーションの有り様にもさまざまな変化が起きつつある。かつては、“How to do” を創り出す「インベンション (発明)」が世の中に変革をもたらしていた。やがて、“How” を束ねて “Something new” を創り出す「イノベーション」が重要になった。今日では、イノベーションで目指すところをあらかじめ見定めておくことも求められるようになり、“How” を束ねるに先立って “What to do” が問われている。目指す “What” のためには、関係する組織の内部・外部に限らず、あらゆるところに “How” を求めるようになってきている。それへの対応が、昨今重要視されている「オープンイノベーション」と言ってもよいであろう。

加えて、我々が直面する大規模、複雑そして困難な課題に挑んでいくためには、「なぜそれを行うのか」、「何のためにそれを行うのか」、さらに敢えて行わない場合には、「なぜ行わ

■ 西尾 章治郎
大阪大学 総長

1975年京大卒，1980京大博士修了（工学博士）。京大助手，阪大助教授，阪大教授，阪大理事・副学長などを経て，現職。本会副会長，日本データベース学会会長などを歴任。本会，電子情報通信学会，IEEEの3学会フェロー。本会功績賞，紫綬褒章，文部科学大臣賞など受賞。



ないのか」が問われるようになってきている。つまり，“Why we do”をも考えることが求められている。そのため，イノベーションの課題はエコシステムやネットワークで繋がった広範な課題へと推移している。

一方，大学が行政，産業界，市民のあらゆる活動主体とかがわっていく過程において，これからの大学が果たすべき新たな役割として，“How to do”という「手法的」なことよりも，“What to do”，さらには“Why we do”といった，より「根源的」なところから共に創造していく，つまり，「共創（Co-creation）」することの比重が高まっている。また，その「共創」のためには，人文学・社会科学から自然科学に至る多様な学術領域とそれらに携わる研究者の「協奏（Orchestration）」が求められている。

たとえば，産学連携活動ひとつをとっても，“What to do”段階をはじめとする包括的なものへと進化させるとともに，価値の共創に向けて社会と大学の関係を再定義することが必要になっている。また，俯瞰的な視点のもとで社会とともに新しい方向を模索し，「協奏」できるオールラウンドな資質を備えた博士人材の育成がより強く求められている。

このようにインターネットによるオープン化の波は，大学の有り様，使命にも次なる変革を迫っている。そのような新たな波を見据えながら，大学においては，「共創に向けた新しい協奏のかたち」を探求するところから，大学改革への新しい動きが始まると考えている。

